

して近郷を押領せしに依つて、信長公追拂ひ給ひし時、宇川村へ退去すと。今按ずるに、三谷は能美郡にて小松の近邑なり。宇川村は即ち鶴川村をいへり。又三壺記に、天正八年十一月廿日に越前柴田修理九勝家より飛脚到來、今月朔日に加賀國の一揆共打起つて、上方へ發向すと聞えしゆゑ、府中の侍・大聖寺の侍共御幸塚まで催して、數千騎押寄討取首帳の中に、宇川常徳寺・同新四郎と書き載せたり。北陸七國志にも、天正八年柴田勝家等加賀國に討入る。佐久間玄蕃允盛政謀略を廻し、尾山城を攻取つて、岸田入道常徳齋・一子藤六等の賊徒悉く討取り、加州平均に及ぶとあり。

○祇園社

此の社は常徳寺の南隣にて、延寶の金澤圖に、規行院とあり。按ずるに、規行院は當社の別當にて、後願行寺とて修驗派の山伏也。明治二年神佛混淆御廢止に付き、願行寺復飾して泉守衛と改稱し、神職と成り、祇園の社號を廢し、八坂社とせしかど、氏子・社祿等なき神社なるに依つて、泉野神社へ合併の旨縣廳より達せられしが、近所の商家共より願に依つて、社殿其のまゝ建て置き、無格社と定めら

れ、修繕方等近邊の商家共よりなしけるとぞ。龜尾記に云ふ。犀川祇園の別當は、本山山伏願行寺とて、利家卿當國入部の頃、越前府中より召連れられ、諸所に居をしめ、遂に金澤泉野に一字を造立し、祇園社と號し、御寄附の長刀を持ち傳へ、今猶堂宇に掛け置きたり。といへり。今按ずるに、金澤市に兩祇園とて、犀川・淺野川の兩所に一社宛祀れり。祇園社は牛頭天皇と稱すれど、其の實疫神を祀り鎮めたるなれば、藩祖利家卿當國入部のはじめ、修驗行者の山伏共をして、祇園牛頭天皇の神靈を祀り鎮められたるも、金澤市中疫病の祈禱を命ぜられしより起りたるならんか。

○祇園會事略

祇園會の濫觴を考ふるに、日本紀に、崇神天皇五年、國內多疫疫。民有死亡者。且大半矣。とありて、天皇いたく憂ひ給うて、夢想の神託を諸神に乞ひ給ひ、その告に任せ祭り鎮め給ひ、便別祭八十萬群神、仍定天社國社及神地神戶。於是疫病始息。國內漸謐。五穀既成。百姓饑乏。とある、是の起原也。是よりして後々疫神を祀らしめ給ひ、續日本紀

に、光仁天皇寶龜元年六月甲寅、祭疫神於京師四隅畿內十堺など見たり。内侍所御神樂式に、韓神之事。素盞雄尊子也。有帝基安泰之誓。故宮中祭之。とある故にや、國韓神社は疫神を祀り鎮められたるよしいへれど、伊勢貞丈雜記に、六月嘉祥の祝は、平城天皇大同年中より始めて、少彥名命・國韓神に酒餅を備へ奉りて、疫病を祓ふ御祈なりしが、仁明天皇承和十四年の頃、二神の御告有りて、十六日の數によそへて、もちる。このみ十六の數を神に備へ祭り給ひ、年號も嘉祥と改元ありし由、鴨長明が四季物語に見わたれども、右の事日本紀を初め、延喜式・江家次第等正しき書に見えず、信用すべからずといへり。按ずるに、疫病を祈請するに素盞烏尊をいへるものは、備後風土記に載せたりし蘇民將來の故事より起れり。故に世俗問答の祇園會の條にも、此の祭の日四條京極にて粟の御飯を奉るは、蘇民將來の由緒ありと承る。祭は天治元年六月に始りし也とありて、天治は崇徳天皇の御世なり。但し天治元年に始るといふは非ならん。祇園社の起原は、それよりさき既に造立ありと見えて、百練抄に、後冷泉天皇永承七年五月廿

九日、大安寺東寺新造神社。行御靈會。依可止疫疾御示現也。世名曰祇園社。と見え、諸神記に、天祿三年、以祇園社爲日吉末社。祇園牛頭天皇、初垂跡於播磨明石浦。移廣峰。其後移北白川東光寺。其後陽成院御宇移感神院。託宣曰。我天竺祇園精舍守護神云々。故號祇園社。とあり。また祇園會とて、神輿をかき出し、大路を神幸し、風流の立物山などを出しける事は、中原康富記に、寶徳元年十二月七日、祇園御興迎也云々。如例三基令出御旅所給。銚山以下風流如先々。渡四條大路。十四日祇園祭禮也。神幸如例風流山笠棒已下渡三條大路。など見たり。今世諸國の田舎にも、祇園會とて御輿をかき出し、神幸の式をなしけるもの、皆京都の祇園會に摸擬せしかど、金澤の祇園にはむかしより出興の式はなく、毎歲六月祇園會と稱し、祭禮をなしけり。舊藩の頃は、大暑の時候なるが故に、諸人夕涼みがてら晚景より群集して、往來も成り難き程なりし故、菓物等の商人も路傍へ出店をなし、その賑ひいはんかたなし。然るに明治五年郷村社の區別を立てられし比、犀川祇園社は氏子もなく、從來山伏願行寺の持社にて、永續の見